

3学年だより
NO.568

飛翔

令和3年1月12日



小田原市立城山中学校
学年主任 水野喜代治

心を入れる！・手を抜かない！

「無限の可能性」

教室に、冬休みの国語の課題であった書初めが掲示されている。3年生の課題は「無限の可能性」である。正月に、気持ちを落ち着かせて書くのは、とても良いと思う。毎年、冬休み明けに、校舎の中に貼られる作品を見るのを楽しみにしている。各学年の代表作品が職員室前に掲示されて、先生方の投票で金賞、銀賞、銅賞が決定する。

今年は、自分が書道を習ったので、生徒の作品を見る目が昨年とは違って、筆遣いなど細かいところもしっかり見たいと思い楽しみにしていた。課題は「無限の可能性」である。一枚の紙(半切)に六文字をおめるのは大変である。字の大きさやバランスを意識して書かないと最後の字が小さくなったり、余白ができたりとまとまりのない作品になってしまう。最初の書き出しから、最後を意識して書かなければならない。このあたりが、書道の世界観でもある。私などは、最初が大きく気持ちよく書きだすので、最後は詰まって窮屈になってしまう。後先を見通しできない、自分の性格がそのまま書にあらわれてしまう。恥ずかしい限りである。また、六文字を真っすぐ書くことも難しい。自分では、そう書いているつもりだが、書き終わった作品を壁などに貼って、離れて見みると字が真っすぐに並んでいない。たかだかまっすぐになるように順番に書けば良い事なのに、字の中心を貫くことができない。何枚も何枚も書いて、だんだん、字の中心をとらえられるようになってくる。上段者は、一回で字の中心を串刺しのように貫いて書くので、見ていて惚れ惚れする。

これ以外にも、「はね」や「とめ」や「はらい」など一字一字に気を入れて書いていく。集中して取り組まなければ、筆で字は書けない。私は、学生の頃から字が下手で筆で字を書くことなど、それはもう自殺行為に等しかった。それが、昨年の5月から急に書道に興味を持ち、習い始めてから書道の魅力に取りつかれた。まだ、3級なので自分の名前さえ書くこともできない状態だが、筆をもって、一生懸命に精一杯に字を書くことは心掛けている。字は上手と下手があるが、一生懸命に書いた字は、悪いものではない。精一杯書いたなというのは、見ている人に誠実な気持ちが伝わるものだと思う。気持ちを込めて、書いた字は下手でもちゃんと温もりを感じるものだと思う。そう考えると、真剣に書いた作品は、その人の人柄を感じる素敵な作品なのだと思う。

掲示されている3年生の作品を見ると、明らかに、ただ提出すればよいと思って書いたのではないかと感じさせる作品が目についた。走り書きのような作品に痛々しさを感じた。紙に向き合って、筆を入らせるときに、気持ちを込めるのも、無造作に書いてしまうのも時間的には、そんなに変わらない。気持ちを込めるのに、特別な時間や労力もいらない。ただ、書くときに、精一杯、一生懸命になれば良いだけである。走り書きのような作品になってしまった人は、もうすこし、心の余裕が欲しいなと思った。